

令和2年度 輪之内町立輪之内中学校 評価書

学校の教育目標		「ひとりだちのできる生徒」～自ら考え、よりよく判断して主体的に行動する生徒～	
経営の重点		①確かな人権感覚を育てる教育課程の編成・実施・改善 ②危機管理の徹底 ③学力向上 ④情報モラル意識の向上 ⑤学校のスリム化	
町の重点	評価の窓	評価	2学期までの成果
【学校経営】 全教職員が協力して活力ある学校経営をする。	勤務の適正化と教職員が健康でやりがいをもてる経営	B	・会議の開始終了時刻を設定し、ほぼ時間通りに諸会議が実施されている。また、短く要点をまとめて話し合うことができた。 ・各学期や月の指導の見直しを書面で共有して、学年間の情報共有や連携を密にできた。 ・管理職からの法令の説明があり、勤務の適正化への意識が高まった。 ・「水曜日課」を設けたことで日課表や昼休み指導を見直すきっかけになった。
【研修】 自己の課題を明確にし、主体的に研修を進め、確かな指導力を身に付ける。	学校教育目標実現に向けて資質向上を図り、組織的・継続的な研修の実施	C	・授業研究会などの機会が少なく、授業を観て学ぶことは不十分であったが、若手研修で学び合うことができた。 ・悉皆研修に加えて、県センター研修への主体的な参加があった。 ・自己啓発シート作成と個人面談で、自己の課題を明確にして教育活動にあたることができた。 ・研修等で学んだことを、学校職員全員に還元できるような機会や工夫をさらに行う。
【教科指導】 基礎的・基本的な知識・技能の習得を図るとともに、思考力・判断力・表現力及び自ら学ぶ意欲や態度を育て、学力向上を推進する。	主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善	B	・コロナ禍で、ペア、グループ学習を取り入れ、対話的な学びを作り出す場の設定は弱かったが、各学年・学級でできることを少しずつ工夫して取り組むことができた。 ・どの学年も授業姿勢の向上に自分たちで取り組み、落ち着いて学習できた。 ・少人数指導や支援員の指導で、「自分でできた」や「次もがんばる」という生徒が増えている。 ・授業研究は積み上げることができなかったが、授業で人権教育を推進するという姿勢は続けることができた。
【道徳教育】 自己を見つめる力と他を思いやる心を育てる。	生き方についての考えを深める特別の教科道徳の充実	B	・各学年の学級担任で発問、ワークシートのなどの打ち合わせを行い、年間35時間の授業実施ができた。道徳の指導が大切にされている。 ・職員会で月の重点や他の教育活動との関連等について提案があり、全職員で取り組むことができた。 ・授業後には、生徒の様子や反応、考えの深まりについて学年毎に振り返ることができた。
【外国語教育】 外国語に慣れ親しみ、コミュニケーション能力を高める。	主体的にコミュニケーションを図る姿が具現される指導方法等の工夫	B	・生徒が興味・関心をもつような教材教具を準備して授業が実践できた。 ・ペア活動やグループ活動を位置づけることによって、生徒に主体的にコミュニケーションを進める姿が見られた。 ・英語検定の受験数が増えた。
【総合的な学習の時間】 探究的な学習を通して、よりよく問題を解決する資質・能力を育てる。	「ふるさと輪之内」に学ぶ態度と輪之内を愛し誇りに思ふ心を育成する探究活動の充実	C	・職場体験学習や環境に関わる企業訪問などができず、年間計画のように学習を進めることはできなかった。探究活動を十分行うことはできなかったが各学年で学習内容を工夫できた。 ・1、2年の宿泊研修が中止になったことは残念だったが、研修先についての調べ学習や交流の準備はできた。 ・2年の防災士学習は、中学生の実態に合った内容、学習の進め方などがさらに必要である。
【特別活動】 所属感を高め、よりよい生活や望ましい人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる。	望ましい人間関係や学級集団としてのまとまりを育てる学級経営の充実（QU検査の活用）	B	・コロナ禍の中、行事は少なかつたものの生徒会がよく動いていた。 ・修学旅行やスポーツフェスティバルでは、学級のリーダーを中心に声をかけ合う姿が見られた。一方で、計画や準備・約束決まりが不十分であったため、リーダー指導や協力の協力や団結といったものには弱さがあった。 ・学年主任、生徒指導が学級担任と共に組織的な対応を働きかけたことで、学級担任を中心に、生徒相互の人間関係づくりを意識した指導援助や継続的な支援ができた。 ・年間2回のQU検査で、個別支援、効果的な学級経営を行うことができた。
【生徒指導】 共感的な児童生徒理解に徹し、よりよい人間関係の形成を図り、自己指導能力を育てる。	児童生徒理解の深化を図り、教職員と児童生徒との信頼関係の構築	B	・心のアンケートについて、迅速な対応がなされ未然に防ぐ生徒指導、効果的な支援につながった。 ・心のアンケート、QU検査をもとに月1回は生徒と二者懇談ができた。 ・生徒指導室を中心に、各学年や担当の職員で、丁寧に生徒に寄り添い指導を進めることができた。 ・ロッカーの整頓、机椅子の整頓、残り姿など、継続して指導することができた。 ・些細なことでも相談してくれる生徒が多く、生徒と教員が話しやすい関係であることが分かった。
【キャリア教育】 社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を育てる。	勤労観・職業観を育成する体験活動の位置づけと事前・事後指導の充実	C	・進路指導を通して、自身の将来について考える場を設けることができた。 ・「生きる」という教材を使用して自分自身の将来について1年生から考えることができた。 ・職場体験学習や企業訪問ができなかったこともあり、勤労観や職業観を深めることが難しかった。体験したり、話を聞いたりする機会は減ったが、各学年が工夫して学習を進めることができた。 ・キャリアパスポートを作成し、月の目標、反省を積み上げていくことで次のステップにつなげることができた。三者懇談で保護者とともに成長や頑張りを確認するなど活用していきたい。
【健康安全教育】 運動に親しみ、進んで健康で安全な生活を営む態度を育てる。	自ら命を守りきる防災意識を向上させるための指導方法や指導体制の工夫改善	B	・コロナ対策や熱中症対策等、生徒の健康と安全を最優先に考えた動きができた。 ・マスクの着用や手洗いの指導徹底ができた。給食の様子など職員、生徒とも感染予防に努力できている。 ・緊急時には、救急車の要請や保護者への連絡等、迅速な対応ができた。 ・1学期の終業式の「交通安全指導」はわかりやすく有効であった。自転車の乗り方など、引き続き何度も指導していく必要がある。校風委員会など生徒の活動として安全教育をすすめていきたい。
【特別支援教育】 一人一人の教育的ニーズに応じ、自立し社会参加するための基盤となる力を育てる。	特別支援教育コーディネーターを中心とした校内支援体制づくりと合理的配慮の構築	B	・生活単元の学習で、海津特別支援学校高等部や西濃高等特別支援学校を見学し、進路について考えるきっかけになった。 ・校内教育支援会議を中心に、毎週の生徒指導交流を通して、要配慮生徒への対応について全教職員で情報共有できた。 ・交流学級での授業を通して、温かい人間関係をつくり、生徒間の関わり合いができていく。 ・主幹教諭を中心に担任会などを行い、指導方針や配慮事項について共通理解をすることができた。専門性を生かして働きかけがあり、生徒や保護者との面談、検査を身近に考えることができた。
【人権教育】 自他の大切さを認め、互いに人権を尊重する望ましい人間関係を醸成する。	児童生徒と全教職員が一体となったいじめや差別を許さない学校・学級づくり	B	・いじめをしない、ゆるさないという学校・学級づくりを意識している。しかし、まだまだ揺るがない強さがない。 ・あいさつすることで相手を知ることにつながることで、丁寧な言葉遣いが人権感覚を磨くことにつながることを継続的に指導することができた。 ・ひびきあいの日は、生徒が主体的に考えて取り組むことができた。 ・職員会等で、いじめに関する研修を行い、いじめや差別の事象に対して敏感に反応できる感覚を養った。
【ICT教育】 児童生徒の情報モラルを高め、情報社会に対応できる情報活用能力を育てる。	ICTを有効活用した学習活動の充実	B	・ICTを効果的に活用し、生徒の興味をひく授業を展開することができた。デジタル教科書を使用した授業づくりや、生徒用タブレットを使用した学習を行うことができた。 ・生徒がタブレット端末を使う頻度も多くなっている。上手に活用できる生徒もいれば、情報モラルを守れない生徒もいる。機会を捉えて何度も指導する必要がある。
学校関係者評価		・学校の教育方針や生徒の様子（よさ）が学校だより等で伝えられている。今年度は難しかったが、来年度は授業参観等で子どもの頑張りを認める機会を作してほしい。 ・様々な悩みを抱える生徒もいると思うが、先生方が悩みを聞き、早めの対応をしていることが分かった。 ・今年度はコロナウイルス感染症対策で様々な行事が今まで通りに行えなかったが、その中でも子どもたちはできる方法を考え、取り組んでいる。これからは、そういった力が必要となる。 ・ICT教育が充実しており、子どもたちの学習に役立っている。今後もより有効な活用方法を考え、実践して欲しい。	